

調査区は北側を1区、南側を2区としました。1・2区間の道路予定地部分は、来年度以降に発掘調査を行う予定です。以下に1・2区の検出遺構を簡単に記します。

1区 調査区の西端部は低地状となっており、遺構密度が増すのは川跡を境に中央西から以東です。中央部は土坑や柱穴、溝を中心とし、東半部は並行する東西方向の溝が主体です。柱穴には柱根が残るものもあります。溝は幅約1m、深さ0.8mの規模で共通し、断面は逆台形状です。これらは中世の遺構ですが、近世と考える縦板を組んだ井戸もありました。

2区 1区と同様に西端部は遺構密度が低いものの、中世以前の可能性がある溝を検出しました。中央から東部で中世の土坑、溝、柱穴、井戸などを検出しました。

出土遺物は、1・2区とも、13～15世紀の素焼きの皿、越前焼、中国産の碗や皿が多く出土しました。他に石製品、板材、銭貨などが出土しています。

まとめ 調査の結果、遺構の分布範囲から推定すると、称念寺を中心とする現在の門前の集落が立地する微高地は、本来、さらに南方から東方に延びており、この微高地上に今回の調査範囲を含む中世の集落が広範囲に展開していたと考えられます。 (野路昌嗣)



東から見た調査区の全景 (左：2区 右：1区)



左：柱穴の検出状況 中：残っていた柱の根元 右：井戸枠を持たない井戸